

令和7年6月の解説（週間天気予報）

【6月の天候状況】

上旬は、北日本では、低気圧や前線の影響を受けにくかった北日本太平洋側で旬間日照時間は多かったが、1日は低気圧の接近・通過により大雨となった所があった。また、東・西日本では、前線や湿った空気の影響で曇りや雨の日が多かった。特に8日頃から10日頃にかけては、西日本から本州南岸付近に北上した梅雨前線に暖かく湿った空気が流れ込み、9日は鹿児島県で線状降水帯が発生し、記録的な大雨となった。このため、旬降水量は西日本日本海側と西日本太平洋側でかなり多く、東日本日本海側と東日本太平洋側では多かった。旬間日照時間は、東・西日本日本海側と東日本太平洋側では少なかった。四国地方と九州北部地方では8日頃、東海地方、近畿地方、中国地方では9日頃、関東甲信地方と北陸地方では10日頃に梅雨入りしたとみられる（速報値）。一方、沖縄・奄美では、旬の前半を中心に梅雨前線や湿った空気の影響を受けやすく、4日頃には大雨となった所もあったが、旬の終わり頃には梅雨前線が本州付近に北上し、太平洋高気圧に覆われて晴れた日が多かった。沖縄地方では8日頃に梅雨明けしたとみられる（速報値）。気温は、旬の前半は東・西日本を中心に冷涼な空気に覆われやすかったが、旬の中頃以降は暖かい空気が流れ込みやすく、広い範囲で真夏日を観測した日もあった。このため、旬平均気温は北・東日本と沖縄・奄美では高かった。

中旬は、北日本では、前線や湿った空気の影響で曇りや雨となった日もあったが、旬のはじめ頃や終わり頃には低気圧や前線の影響を受けにくかったため、旬間日照時間は北日本太平洋側でかなり多く、北日本日本海側では多かった。東北地方は14日頃に梅雨入りしたとみられる（速報値）。東・西日本では旬の前半には本州付近に停滞した梅雨前線や湿った空気の影響を受けやすく、特に12日頃にかけては、梅雨前線に暖かく湿った空気が流れ込んだため、広い範囲でまとまった雨となり、大雨となった所もあった。このため、東日本日本海側の旬降水量は多かった。一方、旬の後半には、梅雨前線が日本海から北日本付近に北上し、不明瞭となった時期もあるなど、太平洋高気圧に覆われて晴れた所が多くなったため、東日本日本海側と東・西日本太平洋側の旬間日照時間は多く、西日本太平洋側の旬降水量は少なかった。沖縄・奄美では、太平洋高気圧に覆われて晴れた日が多くなったため、旬降水量は少なく、旬間日照時間は多かった。奄美地方では19日頃に梅雨明けしたとみられる（速報値）。気温は、全国的に暖かい空気に覆われやすかったため、かなり高かった。特に、16日から20日には東北地方から西日本にかけて各地で猛暑日を観測したほか、6月としての日最高気温や日最低気温の高い方からの極値を更新した地点もあった。旬平均気温平年差は東日本で+3.0℃、西日本で+2.6℃となり、1946年の統計開始以降、6月中旬として東日本では1位、西日本では2013年と並び1位タイの高温となった。

下旬は、北・東・西日本では、低気圧や梅雨前線及び湿った空気の影響で曇りや雨の日もあったが、太平洋高気圧が本州付近に張り出しやすかったことから太平洋側を中心に、この時期としては晴れの日が多かった。沖縄・奄美では、期間を通して太平洋高気圧に覆われやすく、晴れの日が多かった。このため、旬降水量は西日本太平洋側でかなり少なく、東日本太平洋側と沖縄・奄美では少なかった。一方、低気圧の影響を受けた時期があった北日本日本海側では、旬降水量はかなり多かった。旬間日照時間は、梅雨前線の活動が弱く、太平洋高気圧に覆われやすかった北・東・西日本太平洋側と西日本日本海側では、かなり多く、東日本日本海側と沖

縄・奄美で多かった。九州南部、九州北部地方、四国地方、中国地方と近畿地方では 27 日頃に梅雨明けしたとみられる（速報値）。旬平均気温は、全国的にかなり高く、特に北日本では、旬平均気温平年差は+4.7℃と、これまでの極値だった 2010 年の+3.1℃を大きく上回り、1946 年の統計開始以降、6 月下旬として記録的な高温となった。30 日は、全国の 914 の観測地点のうち、118 地点で猛暑日となった。

【6 月の検証結果】

「降水の有無」の全国平均の適中率(3～7 日目平均)は、例年値（注）より 12 ポイント高い 81%となった。地方別の適中率では、全ての地方で例年値を上回った。

最高気温の予報誤差(2～7 日目平均)は、全国平均で例年値より 0.3℃小さい 2.1℃で、全ての地方で例年値を下回った。また、最低気温の予報誤差(2～7 日目平均)は、全国平均で例年値より 0.2℃小さい 1.4℃で、九州北部、沖縄地方では例年値を上回ったが、その他の地方では例年値と同じか例年値を下回った。

（注）例年の値は、2015 年～2024 年の平均値です。

【8 月の週間天気予報の利用にあたって】

8 月は年間を通して最も気温が高くなり、真夏日(日最高気温が 30℃以上の日)が最も多く、猛暑日(日最高気温が 35℃以上の日)となることもあります。熱中症対策の情報として、翌日又は当日の暑さ指数(WBGT：湿球黒球温度)が 33 以上になることが予測される場合に「熱中症警戒アラート」が発表されます。これらの情報とあわせて、週間天気予報や 2 週間気温予報に記載される最高気温を熱中症予防など健康管理にご活用ください。平年では台風の接近数が 9 月と並んで最も多く、また、積乱雲が発達して急な雷雨や局地的な大雨が発生しやすい時期でもありますので、最新の気象情報をご確認ください。